

「公共劇場」の誕生と発展

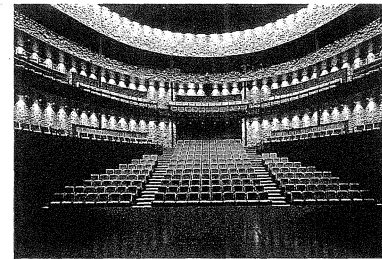
静岡県舞台芸術センターの10年

日本一富士山がきれいに見える劇場——静岡県舞台芸術公園にある屋内ホール「楳円堂」の畳敷きのロビーからは、真正面に富士山を臨むことができます。陽光があふれるロビーから階段を下りていくと、そこには黒く塗られた舞台と赤い椅子のコントラストが美しい、客席数一〇〇の贅沢な空間があります。同じ公園内にあるもうひとつの劇場は、大きな樹木に囲まれ、月明かりや虫の音や雨までも舞台効果にしてしまふ力をもった野外劇場です。そして、稽古場、宿泊施設、事務棟、食堂が点在しています。

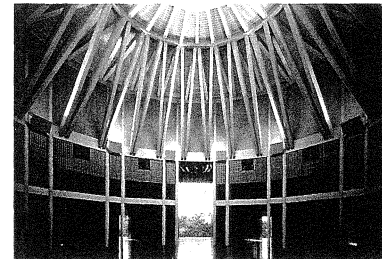
この舞台芸術公園は、財団法人静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center：SPAC）の芸術総監督鈴木忠志と建築家磯崎新氏が熟考を重ねて創り上げた舞台芸術のための専門施設です。ロバート・ウィルソン、ユリー・リュビモフという世界の名だたる演出家がこの劇場群を訪れるたびに「この劇場で演出したい」と熱く語る、芸術家を刺激

する空間でもあります。そしてさらに、東静岡駅前の文化複合施設の中にある客席数三五〇の静岡芸術劇場（設計磯崎新）もSPACの活動拠点施設です。

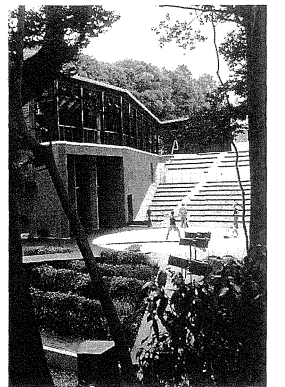
しかし、SPACの最も特筆すべき点は、これらの施設の素晴らしさではなく、そこで活動する芸術集団があるということです。四三名の俳優、照明・音響・舞台・衣装スタッフ、制作スタッフからなる芸術局と、それを統括する芸術総監督。芸術総監督は事業に関わる人事権と予算の執行権をもち、それは財団の寄附行為に明記されています。この芸術集団は、舞台を創造して国内外で上演するだけでなく、国際的な舞台芸術祭の開催などの劇場運営、人材育成事業を行います。また、舞台芸術公園と静岡芸術劇場の両方の公共施設が、県議会の議決を経て、SPACの専用施設として設置条例の中で位置づけられています。



静岡芸術劇場



静岡県舞台芸術公園内 屋内ホール「楳円堂」



静岡県舞台芸術公園内 野外劇場「有度」

高さがあります。

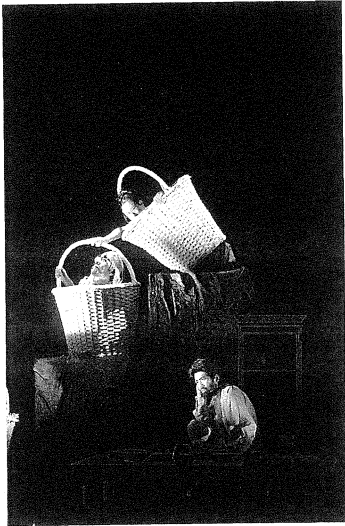
平成九年に本格的な活動を開始して以来、SPACはさまざまな事業を行ってきましたが、平成一四年から文化庁芸術拠点形成事業の支援を受けたことで、その活動をより大きく発展させることができました。

専属劇団による作品創造を行い、静岡の拠点施設だけでなく、日本各地の公共ホールともネットワークを創り上演してきました。今年一月には、新国立劇場との共同制作で、鈴木忠志演出による『シラノ・ド・ベルジュラック』『イワーノフ』『オディプス王』を新国立劇場の中劇場と小劇場で同時上演しました。新国立劇場でひとつの劇団が三作品を一挙に上演するのは初めてのことで、また、ギリシア、フランス、ロシア、中国などの演劇祭にも

招待され、今まで八か国で公演活動を行いました。こういうことができるのも、施設を専門的に使用できる劇団が存在するからです。

毎春開催している国際舞台芸術祭「Shizuoka 春の芸術祭」も、昨年からテーマを設け、上演だけでなく、そのテーマに沿って第一線で活躍する講師を迎え「社会講座」を開講しています。また、ロシアとの舞台芸術の交流も年々拡大させ、ロシアでは「静岡」は演劇のメッカとして認知されています。

その一方で、小学生が舞台の上で一芸を披露する「異才・天才・奇才 こども大会」、毎年四〇〇〇名の中学生に本格的な劇場で観劇体験をしようとする「中学生文化芸術鑑賞推進事業」、専属俳優やスタッフとともに作品を創造する「県民参加体験創作劇場」などの幅広い人材育成事業も行っています。



SPAC公演『イワーノフ』（鈴木忠志演出）

芸術集団があり、専用の施設があることの利点は、これらの事業を有機的に連動させて実現できることです。劇団として質の高い作品を創造、発表し、その俳優やスタッフが人材育成も行うことにより、将来の舞台芸術を担う人材と、観客を創り出すことを同時に、継続して行うことができるのです。劇場に来れば、そこに

必ず俳優やスタッフがいて、観客としても、出演者・スタッフとしても、いつでも事業に参加することができるのです。

しかし、このシステムを持続させるには、財政的な基盤の確立が重要になります。優れた俳優やスタッフを確保するためには、安定的な財源の保証が必要です。また、人材育成は継続性が大事ですし、基本的には収入が少ない事業なので、財源を持続的に確保しなければ実施できません。芸術拠点形成事業の支援によって、より長期的な展望をもった事業を展開することができたといえます。

平成一九年三月に鈴木忠志現芸術総監督が退任し、演出家でク・ナウカ シアターカンパニーを主宰する宮城聰が新しく芸術総監督に就任することが決まりました。一年目を迎え、SPACは第二期に入ります。基本方針はそのまま引き継がれますが、SPACの事業に青少年がアクセスするチャンネルをさらに増やすことが、新芸術総監督の大きな方針です。コンピュータや携帯電話の普及により、生身によるコミュニケーションの場が少なくなっている現代社会の中で、舞台芸術が果たす役割はますます重要になっていくと思われまます。SPACはさらに新しい挑戦をしていきたいと考えています。

（静岡県舞台芸術センター芸術局長 重政良恵）